

地域における教育支援

— 学校支援ボランティア活動に関する考察 —

Support of Education in Region

— Consideration concerning school support volunteer's activity —

熊 田 凡 子*

Abstract

This research showed that the school support volunteer activities, the elementary school support activities in Hakusan City were useful for improving the power of the local education. It could be tested that the elementary school pupils were eager to learn something and very active to every aspects by the school support volunteer activities participating in the school educational activities. To expand and improve such school support volunteer activities, we consider it important that the local coordinators make the area and the schools work together. For the purpose, it will be necessary for us to bring up the coordinators.

キーワード：学校支援ボランティア／地域コーディネーター／教育の創造／生きる喜び

1. はじめに

平成 18 年に改正された教育基本法では、新たに「公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」や、「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」に関する規定が盛り込まれた。

しかしながら、急速な都市化や核家族化の進行、情報社会の進展、個人主義的傾向の浸透などにより、人間関係や地域における地縁的なつながりが希薄化しており、青少年による凶悪犯罪やいじめ、不登校などの諸問題が発生している。地域によっては子どもたちが安心して過ごすことができる遊び場所さえ確保することが難しくなっている現況がある。

文部科学省では、平成 19 年度より「放課後子ども教室推進事業」を開始し、放課後や週末等に小学校の教室等を利用して、地域の方々の参画により、子どもたちに学習やスポーツ・文化活動、地域住民との交流活動等の機会を提供していくこ

とになった。また、本年度からは、地域住民による学習支援や部活動指導、学校環境整備などのボランティア活動として「学校支援地域本部事業」を開始し、地域ぐるみで学校運営を支援する体制が具体化され、導入され始めている。

石川県では、平成 15 年度に県教育委員会の「石川の学校教育振興ビジョン」の施策から学社融合の推進が組み込まれていた。しかし、実際には各地域や学校において活動に違いがあり、取り組み状況にも温度差があった。

そこで、本研究においては白山市のある小学校支援の取り組みについて、体験・調査を通し、地域による学校支援の在り方について考察することにした。この地域では、県派遣社会教育主事により、平成 14 年度から、学校と地域が連携した活動が盛り込まれ、平成 17 年度には学校支援ボランティアの活動をすでに実施している。

学校支援ボランティアが国の地域教育支援事業として導入された現在、社会教育団体であるスポーツ少年団指導員がどのように地域とかかわり、学校支援を行っているか、本研究では、筆者の体

* Namiko KUMATA
北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科

験より、小学校の外部講師としての支援の在り方、学校との連携方法、児童とのかかわりについてなど、様々な観点から、スポーツ少年団指導者が学校にボランティアとして入ることのメリットを見出す。また、教師、保護者による教育支援に関するアンケートを行い、その結果から今後の学校支援ボランティアがどうあるべきか、また大学生によるボランティアの展望についても考察したい。活動内容も含め、人と人とのつながりの必要性についても併せて考えていきたい。

2. 学校支援ボランティアとは

学校支援ボランティアとは、

「学校とボランティアによる教育の創造である。」¹と考えられる。

学校支援ボランティアは、学校側（教師）と支援側により創りあげられていく教育活動である。

ここで、「学校支援ボランティアが学校の教育活動に参画することで、児童生徒の学習意欲は高まり、より豊かな学習活動を展開することが出来るであろう」と研究仮説を設定したい。そして、この仮説に基づいて、学校支援ボランティアの実態はどのようなものなのか。また、こうした活動をより拡充していくためには何が必要であるかの検証を行うこととする。

学校支援ボランティアには、

1. 学校運営のボランティア
 2. 教育活動のボランティア
 3. 学習環境整備のボランティア
 4. 学校外指導のボランティア
 5. 安全管理に関するボランティア
- の活動に分けられる。

本稿においては、教育活動のボランティアを重点的に、社会教育団体であるスポーツ少年団指導員の取り組みを取り上げることとする。

3. 学校とスポーツ少年団

完全学校週5日制の実施や、総合的な学習の時間が確保され、学校・家庭・地域が連携して学校運営全体の工夫改善が進められている中、青少年のスポーツ振興においても、地域と学校が積極的に連携することの必要性は高まっている。そこで、地域の教育力活性化に向けた総合的な取り組みで

ある「子ども週末活動支援事業」のモデル事業の一つとして - 放課後子どもスポーツ活動活性化事業 - 都道府県教育委員会と市町村体育協会との連携によりスポーツ少年団による活動が位置づけられ実施されている。

スポーツ少年団とは、スポーツによる青少年の健全育成を主な目的としてきた。しかし、「スポーツ振興基本計画」（平成12年9月、文部省）や「子どもの体力向上のための総合的な方策について」（平成14年、中央教育審議会答申）においては、地域と学校の連携によるスポーツ振興事業としてもその役割が期待されてきている。中でも、「放課後子どもスポーツ活動活性化事業」においては

1. 子どもたちがスポーツの楽しさ、爽快さ、達成感などを体験する機会を豊かにする。
2. 生涯にわたりスポーツに親しむ基礎を培う。
3. ルールを守り、健康でたくましい体づくりに資する。
4. 放課後において、地域のスポーツ指導者を活用した多様なスポーツにふれあう機会を提供する。

の事業趣旨からも、スポーツ少年団活動による教育支援の活性化に期待が寄せられているのである。

本研究でかかわるスポーツ少年団は、水泳が主体であり、平成17年度に小学校のPTAのボランティア活動が発端となり結成された団体である。当時、PTA会長が日本体育協会公認の水泳指導員資格を取得しており、地域指導員でもあったことから、夏休みの水泳教室の開催、さらに週末に指導を行なうスポーツ少年団活動、授業の外部講師としての支援活動へと活動は拡充されてきたのである。

4. 研究方法と内容

1) 研究方法

①スポーツ少年団の指導者による学校支援ボランティアとしての授業参画から

（白山市立M小学校3年生1クラス、33名、担任教師1名＊体育科「浮く・泳ぐ運動」）

②児童の感想から

（学校支援ボランティア活動を行った白山市

小学校3年生33名・4年生19名・6年生18名の回答から)

③学校支援ボランティアに関する調査から

(小学校教師によるアンケート:12名回答)

④学校ボランティアの認識に関するアンケートから(白山市立小学校保護者89名回答)

2) 研究内容

白山市におけるM小学校3年生1クラス33名の授業、体育における水泳指導におけるエピソード、実施するまでの過程、実践後の気づき、クラス担任からの評価より、学校支援ボランティアのメリット、留意点を考察する。さらに学校支援ボランティア活動に対しての児童の感想、教師及び保護者対象のアンケートから、学校支援ボランティアの在り方、今後の展望を考察する。

5. 学習活動への参画

1) 実施にあたって

○学習内容

浮く・泳ぐ運動

○対象

小学校3年生、人数33名、教師1名

○日程

平成20年7月1日~19日

毎週金曜日 3時限目10時35分
~11時20分(45分授業)

7/4、7/11、7/18 計3回

○場 所 白山市立M小学校プール

○目標

浮く・泳ぐ運動を安全に楽しく行うために
子どもたちの実態レベルに応じた専門的指導
楽しさや喜びを味わう
担任のサポートとして

○環境整備

施設の状況の確認(危険箇所点検)

プールの大きさ(25mプール・小プール有り)、
シャワー、更衣室など

○担当クラスの状況

元気があり活気にあふれている。

水慣れの段階の児童が3名いる。

担任教師が一人で指導が困難

(クラス全体を把握しながら個に応じた指導を

行うことは難しい。)

○指導員の人数

初回:2名、2・3回目:1名

○他、用具等

ビート板等の確認

活動前に担任教師に情報提供を依頼する。事前に訪問し、確認する方法が望ましい。Eメール、電話等で連絡を密に行う。

2) 学習活動案の作成

○活動内容

第1回:水慣れ段階の児童を中心にした活動
浮く・伸びる

第2回:基本姿勢を中心にした活動
けのび・バタ足(クロール)

第3回:児童一人ひとりに応じた活動
歩く・もぐる・伸びる・泳ぐ・遊ぶ

と発展させ、児童一人ひとりに目標をもつことができるような活動を推進していく。

○単元目標

浮く・泳ぐための基本姿勢を習得し、一人ひとりが目標を持って夏休みを迎えることができるようにする。

○指導にあたって

担任教師との指導内容の確認・打合せを必ず行い、指導の方向性を共有するようにする。

4) 学習活動の実施

○学習目標

第1回:クラス全体で楽しい授業、基本姿勢の習得

第2回:クラス全体で楽しい授業、基本姿勢の習得、一人ひとりが自信を持つ

第3回:クラス全体で楽しい授業、夏休みに向けて一人ひとりが課題を持つ、より安全により楽しい夏休みを迎えるために

○展開

第1回:表1参照

第2回:表2参照

第3回:表3参照

表 1

第 1 回

| 学習活動 | 外部講師の支援と評価 | 担任の支援と評価 |
|---|---|---|
| 1. 自己紹介・導入 準備体操、シャワー 2. 水中歩行 プールの横サイド 15m を使用。 7～8 名ずつスタート 3. 板付きキック (ビート版バタ足面かいぶり) 4. 板付きクロール (ビート板面かいぶり) 5. 基本姿勢(グライダ姿勢一けのび) | 「○○○○です。よろしくお願ひします。今日は、みなさんと色んな泳ぎ方の練習をします。」 指導員 2 名ともプールに入り、水慣れ段階の児童に対して「ゆっくり入ろう。」声かけする。 特に水慣れの段階の児童には、楽しい雰囲気、落ち着いて歩行できるよう、配慮する。 できるだけ、一人ひとりの児童とかわちわる。 顔をつける時のタイミングの合図、肘伸ばしなど基本姿勢の指導を行う。 模範泳法し、指導を行う。 水慣れ段階の児童に付いて手を持って安心して活動ができるよう配慮する。 指導員 2 名で模範泳法を行う。 陸上で基本姿勢を確認、児童全員で行う。その際、オリンピック選手の話などを取り入れ興味を持たせ、基本姿勢が重要であることを伝える。できた児童には、けのびバタ足へと発展させていく。 できなかぎり、児童とかわちわり楽しむ。 一人ひとりと挨拶し、ほめる。 宿題「基本姿勢を家でする。」 水慣れ段階の児童には「家でシャワーを頭からかける。顔をしっかりと洗う。」 | 挨拶、準備体操の指示 プール活動の注意事項 外から全体、特に、水慣れ段階の児童を中心に見守る。 腕・肩の回し方を説明 スタート合図をする。 児童の人数の確認 |

表 2

第 2 回

| 学習活動 | 外部講師の支援と評価 | 担任の支援と評価 |
|--|---|---|
| 1. 準備体操、挨拶、シャワー 2. 水中歩行 プールの横サイド 15m を使用。 7～8 名ずつスタート 3. こしかけキック 一板付きキック(ビート版バタ足面かいぶり) 4. 板付きクロール (ビート板面かいぶり) 5. 基本姿勢(グライダ姿勢一けのび) くらげ(リラックス)→ふしうき一けのび 6. 水中じゃんけん 水中じゃんけん一けのびバタ足 7. 自由時間(小プール) じゃんけん列車ごっこ 8. シャワーをして挨拶をして終了 2 名ずつ決まった組で挨拶して着替える。 | 「○○○○です。よろしくお願ひします。今日も、みなさんと色んな泳ぎ方の練習をします。」 指導員 1 名プールに入り、児童とともに水中歩行を行う。安全に注意を配り、児童一人ひとりを認める。水慣れの段階の児童には、楽しい雰囲気、落ち着いて、また自信を持って歩行できるよう、褒め、声かけをする。 できるだけ、一人ひとりの児童とかわちわる。 膝を伸ばすことを伝える。水慣れ段階の児童の足を持って指導する。 顔をつける時のタイミングの合図、声をかけ指導する。 模範泳法し、指導を行う。 水慣れ段階の児童に付いて手を持って安心して活動ができるよう配慮する。 模範して見せる。 浮くことを実感できるように促す。できたことは必ず褒める。 できなかぎり、児童とかわちわり楽しむ。 指導員と水中じゃんけんを楽しむ。 潜れない児童とは水上で行う。 ルールを説明して開始の合図をし、児童とともに楽しむ。 一人ひとりと挨拶し、ほめる。 | 挨拶、準備体操の指示 プール活動の注意事項 外から全体、特に、水慣れ段階の児童を中心に見守る。 腕・肩の回し方を説明 スタート合図をする。 児童の人数の確認 |

表 3

第 3 回

| 学習活動 | 外部講師の支援と評価 | 担任の支援と評価 |
|---|---|---|
| 1. 準備体操、挨拶、シャワー 2. 水中歩行 プールの横サイド 15m を使用。 7～8 名ずつスタート 3. 基本姿勢 (グライダ姿勢一けのび) 4. チャレンジタイム 5. シャワーをして挨拶をして終了 2 名ずつ決まった組で挨拶して着替える。 | 挨拶、準備体操の声かけ 指導員 1 名、プールに入り、児童とともに水中歩行を行う。安全に注意を配り、児童一人ひとりを認める。一人ひとりの児童とかわちわるようにする。 ※泳ぐ前に夏休み中のプール、海での安全注意の話をする。 模範泳法し、指導を行う。 水慣れ段階の児童に付いて手を持って安心して活動ができるよう配慮する。 ふざける児童に注意を払う。 児童一人ひとりがしてみたい泳ぎをするチャレンジタイムであることを伝える。 模範して見せる。クロールは腕を大きく回すことを説明する。 | 挨拶、準備体操の指示 プール活動の注意事項 外から全体、児童の安全監督。スタート合図をする。 夏休み中の注意を言う。 スタート合図をする。 児童の人数の確認 |

5) 振り返り

○ボランティア自身の気づきから

- ・水泳の授業では、スポーツ少年団の指導より児童の人数も多い。教師一人で全体をみながら、指導していくのは難しい。先生の大変さが身近に感じられ、学校支援の必要性を体感した。
- ・担任の教師とねらい・内容・児童の様子などを、共通理解することにより、活動をより円滑に安全に行うことができた。
- ・児童には、少しでも見てもらいたい、声をかけてもらいたい、褒められたい、かかわりたいといった様子がみられる。外部講師とのかかわりにより、活動に対する意欲が高まるものと思われる。
- ・子ども達は一人ひとり個性があり、その子なりの努力が実ると指導者としてやりがいがある。(水慣れ段階の児童が自発的に水中歩行を行い、徐々にステップアップできた。) コーチング指導法(研究)にもつながる。
- ・活動直前の児童や学校の様子などを認識しておくことも重要である。(第2回開始直前の休み時間に児童同士でのトラブルが起こり、教師からの叱責があり、開始時間のずれが生じ、クラスが不安定な状態であった。)
- ・変化の激しい社会を生きる子どもたちと、活動の楽しさを共感できる一人として、今後も学習活動に参画するやりがいを感じる。

○ボランティア支援に対する評価

～担任教師との話し合いから～

- ・安全に円滑に授業を行うことができた。
- ・児童一人ひとりに意欲が見られ、目の行き届いた指導をいただき、あらためて感謝している。
- ・何よりも、水を恐がっていた生徒が自ら親しんでいくようになり、成長をみられたことに驚いている。
- ・専門的な指導、また工夫した活動により、教師自身学習させていただいた。機会があれば、教師に対しての研修会なども希望する。
- ・どんな活動も基本が大事であるとあらためて実感した。
- ・サポート・アシスタントにより、効果的な活動を進めていくことができる。
- ・連絡の行き届きが不十分になり申し訳ない。連

絡を密にする必要性を感じる。

6. 調査結果

1) 児童の感想から

今年度、学校支援ボランティア活動として、かわった小学生3・4・6年生よりの感想からは、「楽しかった」「できるようになって嬉しい」等の、学習への満足感が感じられた。また、一人ひとりの児童がそれぞれ新たに目標を抱くこともできた。

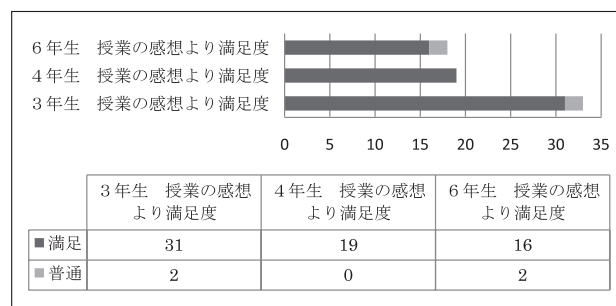


図1 児童の感想より

この結果から、児童は、外部講師による指導で学習の楽しさを味わうことができ、学習意欲も高まったものと考えられる。ボランティアにとってもやりがいを感じる。

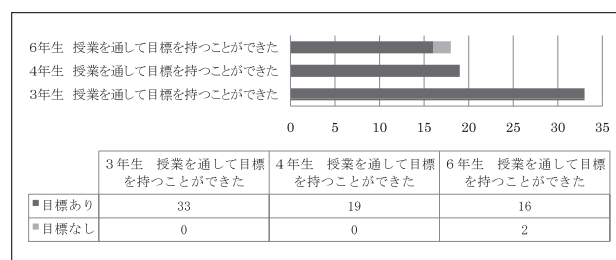


図2 児童の学習意欲

学校支援ボランティアが学校に入ることで、児童自身のよい学習刺激となり、学校生活をより楽しく充実させることができるものと考えられる。

2) 学校支援ボランティアに関する調査から

小学校教師に行ったアンケート調査からでは、外部講師に求めるものとして、専門的な知識や技能などの活用を図り、教育活動を充実させていくことに期待していると考えられる。(図3参照)

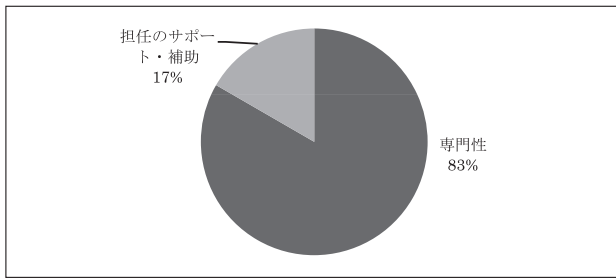


図3 学校支援ボランティア外部講師に求めるもの

専門性とは、その道により通じているという意味でもあるが、学校側（教師）が願う専門性とは、支援者自身の子どもと向き合う姿勢にある。サポート内容にやりがいを感じている姿勢そのものが、子どもの学習意欲をかき立てることにつながる。そうした本物との出会いを通して子どもの感性は豊かに育まれていくのである。

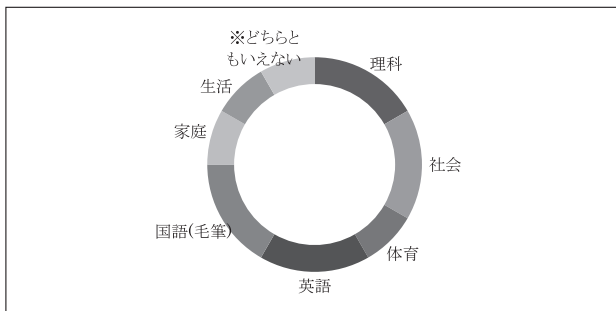


図4-1 支援を希望する教科(実際も含む)

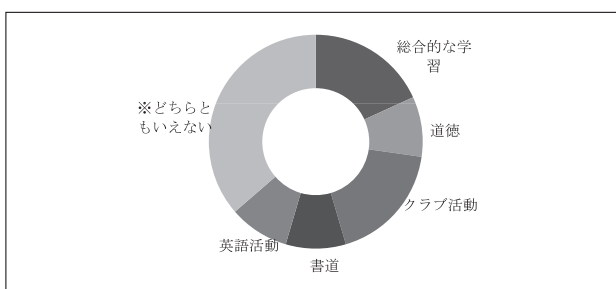


図4-2 支援を希望する教科外活動(実際も含む)

教科指導、道徳教育、特別活動、クラブ活動などの学校の教育活動に、保護者、地域におけるスポーツ指導者や専門家などの支援は有効である。

学校支援ボランティア活動は、子ども一人ひとりにきめ細やかな指導ができる価値ある時間を創り出す教育支援といえる。(図4参照)

また、教育活動をより効果的に進めるにあたり、学校支援ボランティアのような教育資源を、いつどの活動に活用するか検討することも重要である。

道徳の重要性が叫ばれている今日、その道に懸命に努める人の話を直に聞いたり、実際に働いている様子を見せて頂いたりすることは、子どもたちにとって至極価値のある学習だといえよう。

ボランティア自身が「してあげている」という意識ではなく、「させていただいている」という認識により、より「広がるボランティア活動」へとつながるのではなかろうか。

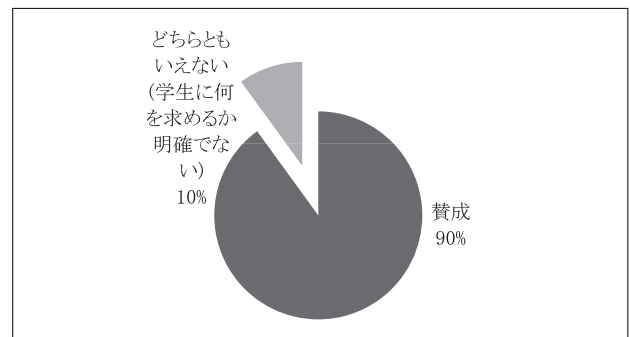


図5 大学生の学校ボランティア参加について

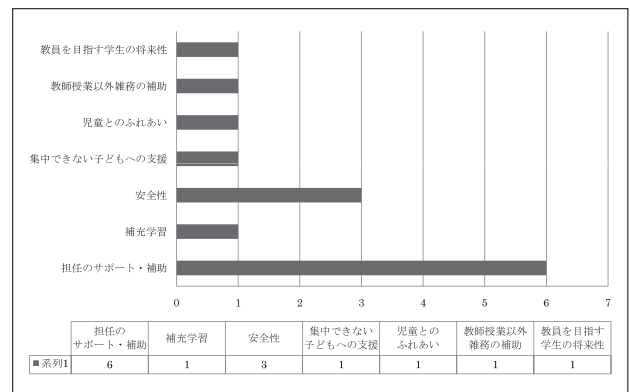


図6 大学生による学校ボランティアの期待

また、大学生による学校支援ボランティアの参加は、学生自身が、支援者として学校に入ることによって、子どもや教師との関わりを通じた生きた学びの場となる。教員を目指す学生自身にとっても目的意識が高まり、将来の可能性は広がるであろう。その際、学生自身にも学習をさせていただく場としての認識が必要である。(図5・6参照)

また、学校側（教師）としても、単にサポート役としての助けだけでなく、学生自身が醸し出す子どもたちへの真摯な対応に少なからず刺激を受け、教職の責任を自覚する機会になるとも考えられる。

3) 学校支援ボランティアに関する認識

小学生の保護者によるアンケートからでは、保護者の学校支援に対する認識をより高めるために、ボランティアとしての参画を促し、地域と学校とが連携協力して活動を推進していくことが、今後の地域の教育力活性化に重要であると考えられる。（図7参照）

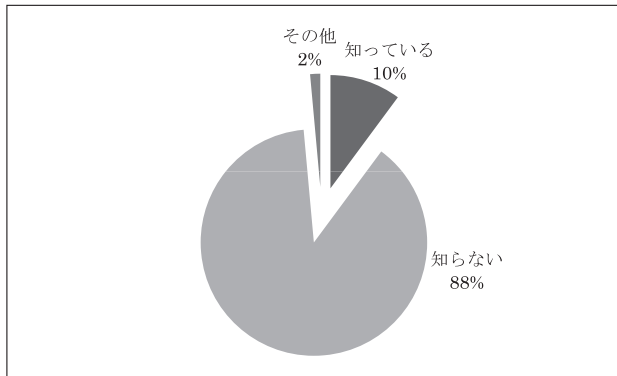


図7-1 学校支援ボランティア活動の認識

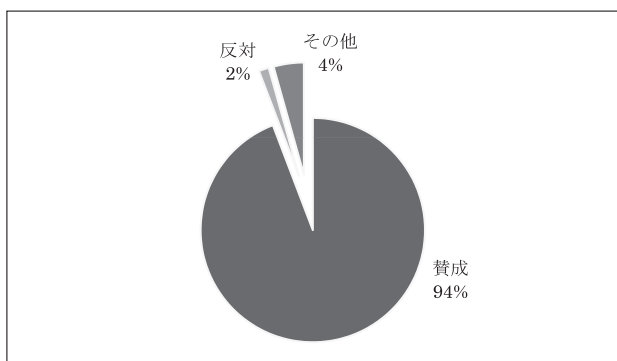


図7-2 学校支援ボランティア講師による学校支援について

保護者に働きかけることによって、保護者の学校教育への関心を高め、学校教育の充実を図ることが望まれる。

適切な情報提供を行い、活動のきっかけ等の条件整備をすることで学校支援ボランティア活動に入っていく可能性も高くなるものと考えられる。

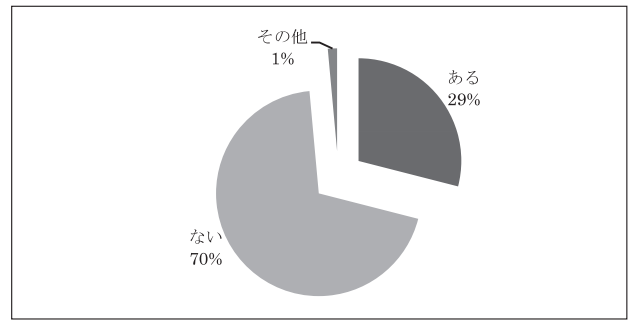


図8 学校支援ボランティアの経験

学校が地域人材を指導者として迎え、教育活動を支えながら、地域の教育力を高めていくことも期待できる。（図8・9参照）

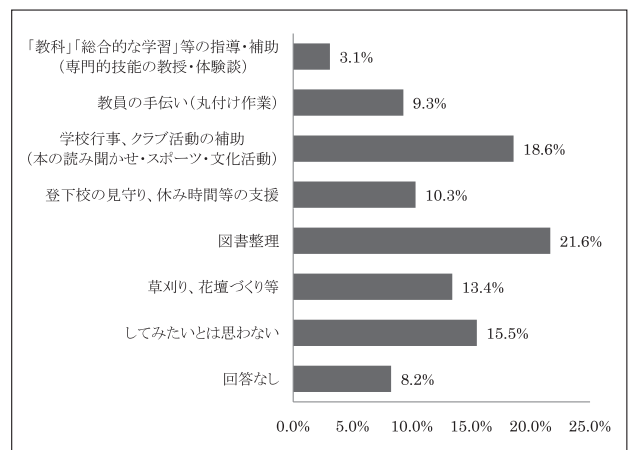


図9 保護者が参加してみたい活動

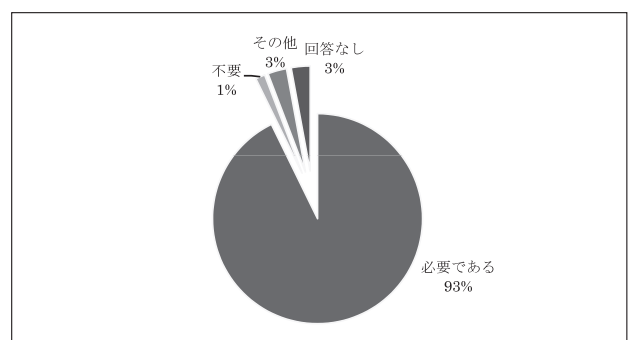


図10 学校支援ボランティアの必要性

子どもの学校生活を多面的に支援するボランティアには、子どもの豊かな人間性を育むためにも、子どもが安全に安心して通学できるためにもその期待は高まっていると考えられる。（図10参照）

7. 結果と考察

(1) 学校支援ボランティアとは、

「学校とボランティアによる
教育の創造である」

本研究の仮説とした、「学校支援ボランティアが学校の教育活動に参画することで、児童生徒の学習意欲は高まり、より豊かな学習活動を展開する」ことは、検証できたと考えられる。

学校側にとっては、社会教育団体の計画した学習プログラムを子どもたちの意欲を高めるための学習活動に生かすことが出来る。また、学校支援ボランティアにとっては、日々の活動で得た学習成果を学校教育に生かすチャンスであり、専門的な学習機会が拡充できるとものと考えられる。

このように、双方のメリットにより、学校側と学校支援ボランティア側が教育活動の形態・内容・方法を共有し一体となって行うことで効果的な教育活動が展開していくことが明らかとなった。

(2) 学校支援ボランティアの活動意義・効果

本研究から、学校支援ボランティアの活動意義について以下の4点にまとめることができる。

- ① 子どもたちにボランティア自身が発する本物のよさと直に触れ合わせることができ、豊かな感性を育む機会となる。
- ② ボランティアが入ることで、学校側（教師）もよい刺激を受け、日々の教育が意欲づく。外部の講師が入ることで、教師自身にとっても学ぶ機会となる。
- ③ ボランティア自身の学習の場になること。生き甲斐とやりがい感を味わうことができ、子ども・教師・ボランティアに開かれた、広がる教育の創造の場であり、生きる喜びの場となる。
- ④ 地域社会教育団体、保護者、大学生、地域ぐるみの教育が推進できる。

(3) 学校支援ボランティア活動の課題

教師の意識の持ち方として、教師自身がまず学校ボランティアの必要性を認識することが必要である。また、ボランティア自身としては、「して

あげるボランティア」ではなく、「させていただいているボランティア」として認識することが「広がるボランティア」へと展望できるのではなかろうか。

また、ボランティアが学校に入ることによって教育内容の充実が図られ、教員の意識改革にもつながる。授業研究等にボランティアを積極的に取り入れたり、発達段階に応じたボランティア支援を考えるなど、教育活動支援メニューの工夫・開発に努めることで豊かな学びの場を創ることが出来る。

また、保護者の学校支援に対する認識をより高めるために、ボランティアとしての参画を促し、地域と学校とが連携、協力して活動を推進していくことが、今後の地域の教育力活性化にとっても有益となる。

さらに、大学生による学校支援は、学生自身の生きた学習の場となると共に、学校支援の認識を深める機会となることから、大学が果たす地域支援の役割に期待が強まってくる。本学においては、学生の参画を促す教員・職員の在り方が今後の課題となってくるのではなかろうか。

このように、多くの人々が学校に入ることによって、より開かれた学校が展望できるわけであるが、活動だけでなく、事前・事後における教育活動や教育指導の在り方も重要である。教育活動支援の実施に際しては、学校とボランティアとの事前の打ち合わせ時間の確保が当面の課題となるであろう。

こうした支援システムを継続し、創造的な教育活動を子どもたちに保証していく上で、学校側とボランティアをつなぎ、その仲立ちをしていく、地域コーディネーターの存在は欠かせないものとなる。今後は、行政、学校とボランティアが知恵を出し合い、地域コーディネーターの育成をはかるための、新たなシステム作りを構築していく必要が重要課題となってくる。

8. おわりに

今回調査・研究をした学校支援ボランティア活動は、地域の社会教育団体であるスポーツ少年団の指導者による、小学校への外部講師としての支援の在り方、学校との連携の方法、児童とのかかわりの面から、様々なメリットを見出すことで

た。また、学校支援ボランティア活動が地域の教育力向上に果たす効果についても考察することができた。

近年、青少年をめぐる問題、地域における人とのつながりの希薄化、個人主義の浸透などにより、地域の教育力の低下が指摘されている中で、地域社会をよりよくするための教育支援のシステム導入が教育行政や学校等教育施設のこれからの役割となってくるのではなかろうか。

今年度、各地域において導入されている学校支援地域本部事業、こうした教育支援システムは、コーディネーター・学校・地域の三位一体で進めていく制度である。受け入れる学校側の理解があること、保護者や地域の社会教育団体にも理解を促すこと、また大学など教育機関の場合では窓口となる教員をポジションとして置くことが併せて必要となってくる。地域の中にシステムを作る作業を具体的に地道に進めていくには、そうした人づくりを進めることが、地域教育支援制度の鍵となる。

学校が子どもたちに開かれ、教師にも開かれ、さらに保護者や地域社会にも開かれ、こうした開かれた連携により、学ぶ喜びを感じ得る生きる喜びの場になっていくであろう。

学校、保護者、地域、行政機関や教育機関との連携が進められ、学校を核に地域の教育力の向上、ひとづくり、生涯学習社会の基盤づくりにつながっていくことを大いに期待したい。学校支援ボランティア活動そのものが、「民度」を高める事業として、人と人とのつながりの中で広がっていくことを願い、今後も支援していきたい。また、今

後の本学の支援活動においての課題としても推進していきたい。

<注>

- 1) 伊藤俊夫 2001 学校支援ボランティアの必要 社会教育8月号 全日本社会教育連合会12-14

<引用文献>

- 1) 伊藤俊夫 2001 「学校支援ボランティアの必要」『社会教育』8月号 全日本社会教育連合会 12-14

<参考文献>

- 1) 齋藤勉 2001 「学校支援ボランティアのシステムを構築しよう」『社会教育』第662号
- 2) 木更津市教育委員会教育部学校教育課学校支援ボランティア 2007 「木更津市の学校支援ボランティア」『社会教育』第734号
- 3) 五十嵐秀介 2008 「学校支援ボランティア活動推進に関する調査研究」『社会教育』第743号
- 4) 銭谷眞美 2007 「社会総がかりで地域の教育力の向上を」『社会教育』第737号
- 5) 佐々木秀幸〔ほか〕 2008 『公認スポーツ指導者養成テキスト共通科目Ⅰ』財団法人日本体育協会
- 6) 青野耕一〔ほか〕 2005 『水泳指導教本第2版』財団法人日本水泳連盟
- 7) 亀井浩明〔ほか〕 1998 『「生きる力」と生涯学習』財団法人全日本社会教育連合会
- 8) 伊藤俊夫〔ほか〕 2003 『豊かな体験が青少年を育てる』財団法人全日本社会教育連合会
- 9) 小千谷市立小千谷小学校 2001 『地域が学校 地域の学校～学習参加から学習参画・ボランティア～』
- 10) 国立教育会館 社旗教育研修所 1998 『家庭・学校・地域の連携・融合のすすめ』(株)ぎょうせい
- 11) 石川県教育委員会 2003 『石川の学校教育振興ビジョン』